

経済政策における幸福度の再検討—想起・順応・合理化の視点から

要旨：本稿では、各種アンケート調査の結果を分析して、想起、順応、合理化の視点から、幸福度指標を経済・社会政策に応用する際の三つの留意点を検討した。第一に、幸福から連想する言葉や内容は人によって異なり、それが主観的幸福度の違いをもたらす。第二に、人びとの幸福度の順応を統計的に把握することは容易ではない。第三に、ある種の世界観は幸福度や所得に有意に影響する。これらの結果は、幸福度の分配原理、幸福度測定 of 精緻化、世俗的合理主義との折り合い等、幸福主義的な政策立案上の諸課題を提示している。

JEL 分類番号：I31, J22, D60

キーワード：幸福度、合理性、世界観

1. はじめに

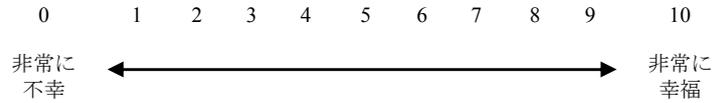
近年、経済的な豊かさを表す国内総生産(GDP)を補完・代替する尺度として、主観的福利(Subjective Well-being)、幸福度(Happiness)、生活満足度(Life Satisfaction)が注目されている。例えば、CMEPSP(2009)、OECD(2011)、UN(2012)、World Economic Forum(2012)があり、日本においても、内閣府(2012)が、主観的幸福感を上位概念として、経済社会状況、心身の健康、関係性の3本柱からなる指標を提案している。幸福度指標の経済政策への応用は、市場価値では測ることのできない豊かさの実感の追求に資すると期待される一方、幸福度指標にはいくつかの克服すべき課題が残されている。本稿では、幸福度指標について、想起、適応、合理化の視点から検討して、経済政策に応用する際の留意点を提示する。

2. 幸福度の再検討

2.1 想起

幸福度の決定要因の分析や計測手法の精緻化については、数多くの研究が存在するが(Frey and Stutzer 2002, 大竹他 2010, Kahneman et al 2008)、これらの研究では「幸福とは何か」「何が幸福か」という問いはいったん棚上げされている。一般に、幸福論は主観主義的と客観主義的があり、前者には快樂説(Hedonism)、欲求充足説(Desire Satisfaction)、真正幸福説(Authentic Happiness)、後者には客観的リスト説(Objective List)、エウダイモニア説(Eudaimonia)が含まれる(安藤(2010))。このように幸福の内容には諸説があるため、本稿では、2012年6月に私立文系大学生372人を対象として、以下の通り、主観的幸福度と連想する言葉・内容を調査した。

Q2. 全体として、あなたは普段どの程度幸福だと感じていますか？「非常に幸福」を 10 点、「非常に不幸」を 0 点として、あなたは何点ぐらいになると思いますか？当てはまるものを 1 つ選び、番号に○をつけてください。



Q3. あなたにとって、「幸福」に最も近い言葉は何ですか。次の中から 1 つ選び、番号に○をつけてください。

- ①興奮 ②高揚 ③絶頂 ④歓喜 ⑤平穏 ⑥安心 ⑦平凡 ⑧無事

Q4. Q2 で幸福度を答えた際、何を思い浮かべましたか。最も当てはまるものを 1 つ選び、番号に○をつけてください。

- ①家族 ②友人・恋人 ③健康 ④仕事・就職 ⑤部活動 ⑥震災 ⑦金銭 ⑧社会問題

幸福度の最頻値は 5 (84 人、22.6%)、平均値は 6.02 であった。図 1 に幸福に最も近い言葉別の幸福度の平均値を示す。「歓喜」を選んだ人が最も多く 110 人 (29.6%) いた。幸福度の平均値が最も高いのは「無事」で 7.33 であった。連想する内容をみると (図 2)、「友人・恋人」が最も多く 178 人 (48.5%)、「家族」と回答した人の幸福度が 6.90 と最も高かった。

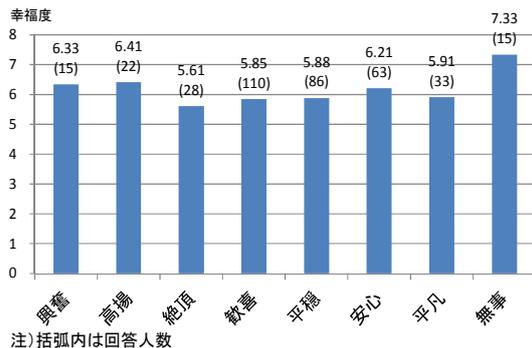


図1. 連想する言葉と主観的幸福度

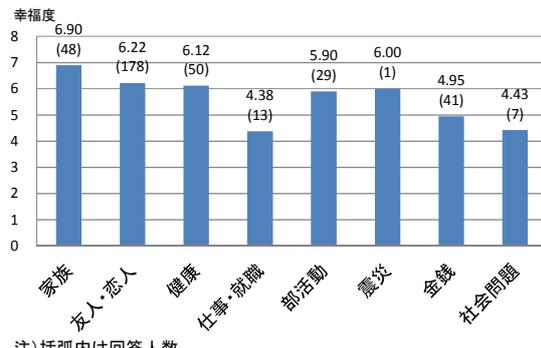


図2. 連想する内容と主観的幸福度

これらの結果は、人びとの幸福感が心理状態・文脈・パーソナリティだけでなく、幸福観（幸福から連想するもの）にも依存することを示唆している。より多くの人びとの幸福感に訴求するためには、家族や友人の喜びに関連する政策が望ましく、幸福感の格差を是正するには、仕事・就職や社会問題の解決が優先される。このように幸福度に基づいて社会政策を決定する場合には、人びとの異なる幸福観の優劣や卓越性の議論が不可避となる。

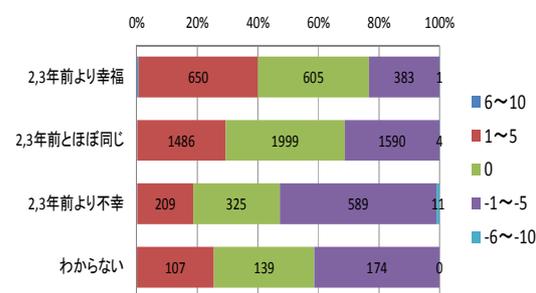
「無事」を連想する人の幸福度が高く、「社会問題」を連想する人の幸福度が低いことも注目される。例えば、治安・国防の強化は人びとに「無事」をもたらすが、それらに従事する人自身は、社会情勢に煩わされて必ずしも幸福ではないかもしれない。これは、人びとの幸せが一部の人の苦役に支えられているという幸福感の分配問題であり、幸福度の単なるばらまきは、社会的な紐帯・統合の喪失を招くおそれもある (Weber(1895))。

2.2 順応

「多ければ多いほどよい」とされる物質的豊かさに対して、幸福度研究は新たな基準を提示してきた。人びとの幸福度は、所得の絶対水準ではなく相対的水準に依存する(相対所得仮説、Clark et al (2008))、所得や資産等の上昇に順応する特性がある(順応仮説、Graham and Pettinato (2002))、心理的な要因により強く依存する等(Diener and Seligman (2004))である。本稿では、大阪大学 GCOE「くらしの好みと満足度についてのアンケート」(以下、阪大アンケート)で得られた個人パネルデータを用いて、順応仮説を分析した。

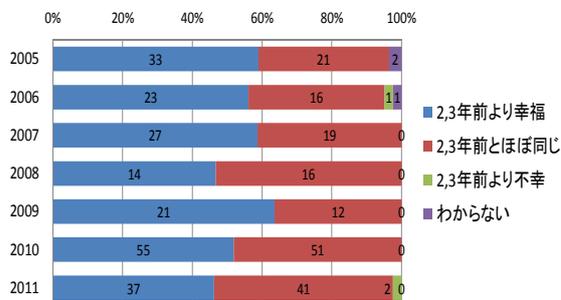
阪大アンケートには、現在の幸福度を 0～10 のスケールで問う質問と、2, 3 年前の自分と比べて現在の自分はより幸福か否かを問う質問がある。そこで、2005～2011 年調査のすべてで回答した個人を抽出して、実際の幸福度の変化(現在の幸福度－2 年前の幸福度)と 2, 3 年前と比較した幸福感とを比較した。

図 3 の通り、2, 3 年前より幸福であると答えた 1648 人のうち、実際に幸福度が上昇していた人は延べ 659 人 (40.0%)であり、幸福度の数値上の上昇と幸福度上昇の実感と間には、ある程度の整合性が認められる。しかし、2, 3 年前より幸福であると答えた人のうち、605 人 (36.7%)の幸福度は増加しておらず、2, 3 年前とほぼ同じと答えた人 (5086 人) のうち、1493 人 (29.4%) の幸福度が増加していた。



注)2004-2011年の調査時点のすべてで回答のあった1383人を対象。

図3. 実際の幸福度の変化(現在－2年前)と2,3年前と比較した幸福感



注)2004-2011年の調査において2年続けて幸福度を10と回答した延べ392人を対象。

図4. 2年続けて幸福度10と回答した人の2,3年前と比較した幸福感

さらに、2004-11 年の調査において、2 年続けて幸福度を 10 と回答した人は、各年の調査で約 50 名前後存在し、その半数は 2, 3 年前より幸福であると回答している (図 4)。

経済政策の効果を評価する上で、人びとの幸せを可視化している幸福度指標の増減に着目することは有益である。しかし、上述の通り、定性的な質問で得られる幸福度の変化の実感と定量的に数値で計測される幸福度の変化とは必ずしも一致せず、また、回答ブラケットの上限では、それ以上の幸福度の増進を把握することができないため、平均的な幸福度の値の上昇をもって幸福度が増進したとは単純に結論付けられない。幸福度の増進のためには、幸福度の値が「高ければ高いほどよい」という物質主義的な基準だけではなく、(第 1 節でみたように)幸福の内容・対象、その測定方法にも注目する必要がある。

2.3 合理化

人びとは幸福を願って生きている。主観的幸福度が高い人ほど幸せであることには異論がない。しかし、その幸福が合理的な行動の帰結であるか否かは明らかではない。「意図せざる結果」は人間の歴史の本源的な不確実性を示す運命性であり(山之内 1997)、例えば、Weber (1885) は、天職理念を土台として、キリスト教的禁欲の精神から資本主義を支える合理的な生活態度が生まれたと述べている。幸福主義や快樂主義を顧慮せず、神から負わされた職業的義務(天職)の実践を人生の目的とすることは、非合理的であるが、その非合理主義の徹底が意図せざる結果としての資本主義的な生活態度を生み出した。

こうした「非合理による合理化」に注目して、本稿では、非合理性が幸福度や経済的成果に与える影響を分析する。人びとは幸せや豊かさを求めて日々生活しているが、その行動はそれらの増進に向けて合目的的に合理化されているとは必ずしもいえず、ある種の信念(Belief)や世界観 (Worldview, Dilthey (1919),大垣 (2010))に支配されている。

2008年の阪大アンケート調査では、表1の各項目に書かれた考えに対して、「完全に賛成」を1、「完全に反対」を5の5段階で、個人の世界観に関する情報を得ている。そこで、2004-11年のデータを用いて、(1)式の幸福度関数を回帰分析する。幸福度 H_{it} は個人 i の幸福度0~10の値であり、世界観 WV_i は、賛成=5、反対=1に反転させた個人固有の変数である。コントロール変数 X_{it} として、年齢、年齢2乗、性別、教育年数、地域ダミー変数(全国8地域ブロック)、調査年ダミー変数(2004-2010)を用いる。

$$H_{it} = X_{it}\beta_1 + WV_i\beta_2 + u_{it} \quad (1)$$

幸福度 H_{it} と世界観 WV_i はともに主観変数であり、内生性の問題がありうる。そこで、世界観と相関があり、幸福度とは独立な変数 Z_i として、各個人の居住する都道府県の日照時間、降雨量、降雪量(総務省『社会生活統計指標』)、面積当たりの神社数、寺社数、人口当たりの信者数(文化庁『宗教年鑑』)を操作変数とした推計((2)式)も行った。

$$WV_i = X_{it}\beta_3 + Z_i\beta_4 + e_{it} \quad (2)$$

さらに二つの分析を追加した。第一に、経済的な成果として(1)式の幸福度に代えて、所得(年収) Y_{it} を被説明変数とする賃金関数を推計した。Barro and McCleary (2003)によれば、天国や地獄といった死後の世界の存在を信じる人の比率が高い国ほど経済成長率が高いが、教会に熱心に行く人の比率が高いほど経済成長率が低い。Lipford and Tollison (2003)は、熱心な宗教活動は所得に負の影響を与えることを示している。

第二に、心の平静を望む人は、幸福度の増進だけでなく、幸福度の極端な変動を避ける傾向があるかもしれない。また、幸福度の水準だけでなくショックからの回復力も注目されている(Graham and Oswald (2010))。そこで、2時点以上に出現する各個人の幸福度の標準偏差と所得の変動係数を(1)式の被説明変数とする分析も行った。

推計結果は、表1の通りである。Dubin 検定および Wu-Hausman 検定により、帰無仮説が棄却されない場合には、(1)式の推計結果を掲載している。サンプルサイズは、延べ13,750人、操作変数法では10,200人である。

表1. 幸福度、所得と世界観

	幸福度		幸福度の標準偏差		所得		所得の変動係数	
霊が存在する	0.0455 ***	OL	0.1883 ***	IV	-0.3579 **	IV	0.0098 ***	OLS
	0.0142		0.0457		0.1580		0.0036	
理科の教科書で書かれていることは正しい	-0.3581	IV	0.2348 **	IV	0.0451 *	T	-0.0194 ***	OLS
	0.2979		0.0919		0.0256		0.0055	
天国がある	0.0512 ***	OL	0.2177 ***	IV	-0.0454 **	T	-0.1374 *	IV
	0.0158		0.0827		0.0188		0.0770	
念力で物を動かせる	0.0209	OL	0.2413 ***	IV	0.0318 *	T	-0.4029 ***	IV
	0.0157		0.0785		0.0189		0.0786	
死後の世界がある	0.0784 ***	OL	0.1679 **	IV	0.0302 *	T	-0.0075 **	OLS
	0.0145		0.0759		0.0173		0.0037	
神様・仏様がいる	0.0969 ***	OL	0.2306 ***	IV	-0.0425 **	T	-0.1638 **	IV
	0.0146		0.0865		0.0174		0.0825	
占いを信じる	0.5322 *	IV	0.4338 ***	IV	-0.6350 *	IV	0.3195 ***	IV
	-0.2163		0.1070		0.3429		0.0854	
人間は他の生物から進化した	-0.7310 *	IV	0.2799 **	IV	1.0146 **	IV	-0.4978 ***	IV
	0.4361		0.1426		0.5066		0.1215	
感情より理性を重んじるべきだ	-0.0091	OL	0.2394 **	IV	0.0514 *	T	0.2269 **	IV
	0.0233		0.0982		0.0277		0.1003	

注) 上段は係数、下段は標準誤差を表す。

OLは順序ロジット法、IVは操作変数法、Tはトーマット法、OLSは最小二乗法を表す。

説明変数である世界観の変数の一つずつ回帰式に挿入して推計した(同時に複数挿入していない)。

世界観の変数の外生性について、Durbin検定、Wu-Hausman検定した。

変数は外生的であるという帰無仮説が有意水準10%以下で棄却された場合、操作変数法の結果を採用した。

霊、天国、死後の世界、神様・仏様の存在や占いを信じる人ほど、幸福度が有意に高い。信仰心に篤いほど幸福度が高いことは先行研究と整合的である。幸福度の標準偏差に対しては、いずれも有意に正である。ある種の世界観は幸福感を増幅する。所得に対しては、霊、天国、神様・仏様の存在や占いを信じる人が有意に負に影響する。その一方で、念力や死後の世界を信じる人、あるいは、理科の教科書、進化論、理性を重んじる人の所得は有意に高い。後者にみられる科学的で合理的な精神だけでなく、前者のような(念力や死後の世界という)非合理性が所得の増加に有意に働くことは、非合理による合理化の可能性を示唆している。幸福感や所得を高めるために世俗的な合理主義を徹底することは、逆に、非世俗的な世界観の(意図せざる)働きを損ねる可能性もある。

3. ディスカッション

本稿では、想起、順応、合理化の視点から、幸福度指標を経済・社会政策に応用する際の留意点を述べた。第一に「幸福」から連想する内容は人によって異なる。したがって、人びとの幸福感に訴求する政策を進める場合、人びとの異なる幸福観に優先順位を付けざるを得なくなってしまう。例えば、社会保障の負担と受益のように、世代間で求める政策が異なる場合、不幸をより声高に叫んだ世代に利する政策に傾いてしまいかねない。第二に、幸福度研究は最大化原理とは異なる基準（相対・順応）を提示しているが、人びとの幸福度の順応を統計的に把握することは容易ではない。第三に、社会・経済的な条件や稼働能力を合理的に活用することは物質的な豊かさをもたらすが、こうした（宗教的価値に無関心な）世俗的合理主義だけが幸福度や経済的成果を増進させるのではなく、本稿では、ある種の世界観が幸福度や所得に有意に影響することが示された。幸福度に基づく社会・経済政策の立案が幸福主義の合理化を推し進めるならば、人びとは幸福主義と非合理的な生活態度との折り合いを迫られることになるだろう。

引用文献（一部のみ）

- Diener, E., R.E. Lucas, U. Schimmack and J. F. Helliwell, 2009. *Well-Being for Public Policy (Positive Psychology)*, Oxford University Press, USA.
- Frey, B. S. and A. Stutzer., 2002, *Happiness and Economics*, Princeton University Press, USA.
- Graham, L. and A. J. Oswald, 2010, “Hedonic capital, adaptation and resilience” *Journal of Economic Behavior & Organization*, Vol. 76, Issue 2, pp.372–384.
- 内閣府, 2011. 『幸福度に関する研究会報告（案）—幸福度指標試案— 平成 23 年 8 月 29 日』 幸福度に関する研究会
- OECD, 2011. *How's Life? Measuring well-being*
- 大垣昌夫, 2010. 「世界観と利他的経済行動：行動経済学とマクロ経済学」『現代経済学の潮流 2010』池田新介・大垣昌夫・柴田章久・田淵隆俊・前田康男・宮尾龍蔵編 東洋経済新報社
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編, 2010. 『日本の幸福度』日本評論社
- United Nations, 2012. *World Happiness Report*. J.Helliwell, R. Layard and J. Sachs eds.
- Weber, M. 1895, *Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik*. 『国民国家と経済政策』田中真晴訳、未来社 2000.
- Weber, M. 1905, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*. 『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』大塚久雄訳、岩波文庫 1989.